

名品コレクション展Ⅱ

2024年6月29日（土）～9月8日（日）

名古屋市美術館のコレクション

エコール・ド・パリ

第一次世界大戦後、芸術の都パリには世界各地から夢を抱いた若い美術家たちが集まってきました。

モディリアアーニ、シャガール、スーチン、パスキン、キスリング、藤田嗣治、ヴァン・ドンゲン、ザツキン、ブランクーシなど、故郷を離れた異邦人たちは、貧しいながらも自由に活気に溢れた生活のなかで、パリ生まれのクトリロ、ローランサンといった画家仲間との交友や新しい芸術が次々に登場するパリ画壇に刺激されながら、それぞれ独自の芸術を開花させました。

芸術の都パリに育まれた画家たちは、総称して「エコール・ド・パリ」と呼ばれています。身近な人々の姿や街角の風景を描いた彼らの作品には、キュビズムやシュルレアリスムといった同時代の前衛的な芸術とは違って、庶民生活への親密感が溢れるとともに、異邦人としての郷愁が漂っています。

「エコール・ド・パリ」の系譜につながる日本人画家としては、パリに生きパリの描き続けた荻須高德をはじめとして、田中保、海老原喜之助、岡鹿之助などが活躍しました。

メキシコ・ルネサンス

20世紀初頭のメキシコ革命を背景として、マヤ、アステカといったインディオ文明の復興と新しいメキシコの建国精神を民衆に伝えるために創始されたメキシコ壁画運動は、アメリカ大陸において初めて登場した美術運動として「メキシコ・ルネサンス」とも呼ばれ、世界的に高く評価されています。

壁画運動の三大巨匠であるオロスコ、リベラ、シケイロスはイタリア・ルネサンスの壁画をはじめとして、ヨーロッパの近代美術（表現主義、キュビズム、未来派など）に学びながら、メキシコ民族独自の造型を踏まえた現代の壁画を三者三様に創造しました。

彼らは1930年代のアメリカ合衆国においても数多くの壁画制作を行って、「アメリカン・シーン」の画家たち（シャーン、スローンなど）をはじめとして、アメリカの現代美術の誕生に大きな影響を与えています。

三大巨匠の他にも、壁画運動以降の世代を代表する画家タマヨ、民衆版画家ボサダ、魅力的な女性画家カーロやイスキエルド、写真家ブラボーやモドッティなど、数多くの個性豊かな美術家たちが活躍しました。

北川民次もまた同時代のメキシコに滞在して、野外美術学校の運動に携わりながら、壁画運動から学んだ精神と画風によって、帰国後は日本画壇において「反骨の画家」として活動しました。

現代の美術

第二次世界大戦以降、急速に展開した現代美術は、既成の美術の枠組みを越えて、まったく新しい表現や造形、空間や概念を開拓してきました。パリからニューヨークへ中心地が移行して、国際化した美術界において、数多くの日本人作家が海外に進出して、創作的な活動を活発に展開しています。

名古屋文化圏もまた、荒川修作、桑山忠明、河原温といった国際的に評価の高い作家たちを輩出しました。彼らは、ある特定の概念を言葉や記号などによって提示する「コンセプチュアル・アート」や表現を極限まで切り詰めた「ミニマル・アート」などの現代美術の分野の代表作家として知られています。

1980年代以降になると、現代美術は新しい局面を迎え、その表現と内容がより豊かに多様化して、それぞれの作家の思想（芸術観）が作品のなかに明確に現れてきました。

新しい世紀の激動に翻弄されながら現在も、作家たちは私たちが生きている時代と世界を、過去から未来へと連続する時間の流れのなかで、あるいは生命と宇宙の連関のなかで、それぞれ独自の観点から鋭く探求し、深く思索することによって、新しい美術を創造しようとしているのです。

郷土の美術

名古屋の近代美術は、明治後期頃から本格的に始まりました。東京に学んだ野崎華年と鈴木不知が洋画塾を開設して、後進の指導を始めるとともに、東京美術学校に学んだ加藤静児や太田三郎が文展に入選するようになって、1910年には、名古屋の洋画家・日本画家を結集した東海美術協会が創設されました。

大正期には、名古屋独自の洋画グループとして、岸田劉生の草土社に触発されて1917年に結成された愛美社（大澤鉦一郎、宮脇晴など）や関東大震災を契機に1923年に結成されたサンサシオン（松下春雄、鬼頭鍋三郎など）などが登場しました。

昭和期には、二科会の初期の会員となった熊谷守一や横井礼以、春陽会に参加した山本鼎、帝展の代表作家となった佐分真、独立美術協会に参加した伊藤廉や三岸好太郎、三岸節子などが東京画壇で活躍しました。1930年代の前衛美術の分野では、シュルレアリスム絵画・写真（北脇昇、下郷羊雄、山本悞右など）や抽象絵画（村井正誠、矢橋六郎、山田光春など）が活発な活動を展開しました。

日本画では文展の川合玉堂、院展の前田青邨をはじめ、地元では平岩三陽、渡辺幾春などが活躍しました。

エコール・ド・パリ 画家と画商

作品を仕入れ、コレクターや顧客に売る「画商」は、画家の人生に大きく関わる存在です。エコール・ド・パリの時代には、ただ人気の作家の作品を売るだけでなく、無名の画家を見出し、新しい芸術活動を援助するような画商の存在が、画家やその作品の評価を生み出してきました。今季の名品コレクション展Ⅱでは、一人の画商と画家との関係をご紹介します。

エコール・ド・パリの画家たちの活動を支えた画商として、レオポルド・ズボロフスキー（1889-1932）の名前は欠かすことができません。ポーランドに生まれたズボロフスキーは、フランス文学を学ぶために1914年にパリに渡ります。詩人を目指す中で、芸術家が集まるモンパルナスのカフェに頻りに出入りし、交流のある若い画家の作品を買い、売ることをはじめます。

そうした交流の中で、ズボロフスキーは、キスリングと出会います。同郷の二人は親交を深め、ズボロフスキーがキスリングの作品を買い付けるようになります。そして、キスリングがズボロフスキーに紹介したのが、アメデオ・モディリアーニでした。ズボロフスキーは、1916年からモディリアーニと専属契約を結びます。その当時は、彼の作品のすべてをズボロフスキーが抱えるかわりに、モディリアーニに日給15フランを支払う契約で、画材や生活費などの面倒も見ていたといえます。さらには、自分のアパートの一室にモディリアーニを住ませ、さまざまな画廊で個展を企画し、モディリアーニの名と作品を知らしめていきました。ちなみに、ズボロフスキーはのちに、キスリングの住む集合住宅の同じ階に引っ越しています。

そして数珠つなぎのように、ズボロフスキーは、モディリアーニの紹介でハイム・スーチンと出会い、彼の作品を多く仕入れるようになります。スーチンが独自の画風を得るに至った南仏セレでの滞在制作も、ズボロフスキーが援助をしたといえます。スーチンはこの頃、キスリングやモディリアーニと比べると無名で、有力な画商がついている状態ではありませんでした。しかしある時、パリを訪れていたアメリカの有名コレクターが、当時の有力画商ポール・ギヨームが持っていた1点を見て絶賛、すぐさまズボロフスキーのもとを訪れ、スーチンの作品をすべて購入していったのです。これを契機に、多くの画商がスーチンの作品を買い入れ、スーチンの名前が一躍知られるようになりました。このときのコレクターがアルバート・C・バーンズという人物で、彼が集めた作品は、バーンズ・コレクションという一大コレクションとして、フィラデルフィアに残されています。

ここでは、ズボロフスキーという一人の画商を紹介しましたが、1910年代にはフランスで約130人、1930年には200人超の画商がいたと言われています。個々の作品がどのような来歴を辿ったのかは今後の調査が必要ですが、作品を見ながら、当時の美術界の空気に思いを馳せてみてはいかがでしょうか。

主な参考文献

M.Gee, Dealers, critics, and collectors of modern painting: aspect of the Parisian art market between 1910 and 1930, ph. D. du Courtauld Institut, Londres, 1981

『モディリアーニ展』1992年、毎日新聞社

高階秀爾『芸術のパトロンたち』1997年、岩波新書

メキシコ・ルネサンス 北川民次ゆかりの画家たち

開催中の特別展「生誕130年記念 北川民次展 メキシコから日本へ」の関連企画として、名古屋市美術館のコレクションから新収蔵品を含めた北川民次ゆかりの画家の作品を紹介します。

1921年に北川はメキシコに到着しました。当時のメキシコは壁画運動の最盛期で、ホセ・クレメンテ・オロスコ、ディエゴ・リベラ、ダビッド・アルファロ・シケイロスらが活躍していました。北川はメキシコの画家たちの影響を受け、時には交流をしながら、自身は当時メキシコ全土に広まりつつあった野外美術学校に関わるようになり、1932年にタスコ校の校長となりました。校長時代にはメキシコを訪れた藤田嗣治、国吉康雄、イサム・ノグチらと交遊しました。教え子にはアマドール・ルーゴ、マヌエル・エチャウリ、デルフィーノ・ガルシアなど、その後のメキシコ画壇を背負う画家たちもいました。

1936年に帰国した北川は、交遊のあった藤田嗣治の勧めもあり二科会を中心に活躍しました。1943年に瀬戸に疎開した北川は、戦後も愛知県に定住して活動し、中京圏の画家たちに大きな影響を与えました。

安藤幹衛は1940年から北川に師事し、1949年の東山動物園の児童美術学校にも協力、翌年の中部二科会結成に参加し、東山動物園の児童美術学校の後継として開設された「北川児童美術学園」では現場指導を担いました。1960年代以降はメキシコを度々訪れ、現地で壁画制作も行いました。名古屋市営地下鉄名城線久屋大通駅ホームの壁画《人間賛歌》は安藤が手掛けたもので、馴染みのある方も多いでしょう。

伊藤高義は、1948年に瀬戸で北川と出会い、作風と美術教育の両面から強い影響を受けました。メキシコを中心に美術の旅を70回余り繰り返し、生涯を通して瀬戸とメキシコをテーマにした作品を描き続けました。《マリアッチ》はメキシコ渡航を始めて間もない時期の作で、メキシコではポピュラーな民俗音楽であるマリアッチの楽団を描いています。

竹田鎮三郎は、同郷で中学時代の美術教師だった伊藤や、北川と共に美術教育活動に取り組んだ久保貞次郎との交流の中で北川の強い影響を受け、1963年にメキシコに渡りました。1968年には岡本太郎の助手として《明日の神話》の制作にも携わりました。90歳を目前とした現在もメキシコで活動を続けており、後進の指導も精力的に行っています。《水浴する人々》のようにメキシコ先住民の文化に強い興味を示した作品は、久保によってゴーギャンに例えられ、日本で紹介されました。

現代の美術

生誕 100 年記念 芥川（間所）紗織と 1950 年代

今回の名品コレクション展Ⅱ（6月29日～9月8日）では、芥川（間所）紗織の生誕 100 年記念プロジェクトにあわせて、名古屋市美術館の所蔵する芥川（間所）作品 6 点を紹介する*とともに、彼女が前衛美術家として注目を浴び、活躍した 1950 年代の美術動向や同時期にかかわりのあった作家たちの作品を紹介します。

1950 年代に登場する戦後世代の新人作家たちは、旧来からの団体展への出品にのみ固執することなく、自分たちでグループを作り、研究会を開き、作品発表を行いました。池田龍雄（1928-2020）は朝鮮戦争を機に社会への意識を強め、事件や政治問題を取材した絵画を発表していましたが、1955 年、映画にたずさわる熊谷光之と共同での活動を考えたのを機に、文学、演劇、美術、映画など、さまざまなジャンルを総合した実践活動をする目的で互いの友人たちを誘って制作者懇談会を結成します。美術の分野では石井茂雄、飯田善國、河原温、島村潔がまず参加、それから少し遅れて芥川、石橋和美、奈良原一高が加わりました。彼らの活動が始まった頃、欧米の前衛美術の流れとしてアンフォルメル（フランス語：Art informel／非定型の芸術）が紹介され、日本でも抽象表現の傾向が強まりましたが、リアリズムを掲げ活動していた制作者懇談会のメンバーたちは具象的、形象的表現を貫いています。同年に開催されたメキシコ美術展が若い芸術家たちに与えた影響は少なくないものの、彼らはあくまでその魅力の本質を理解することを重視しました。

吉仲太造は制作者懇談会のメンバーではありませんが、芥川と同様に岡本太郎から誘われ、1955 年第 40 回二科展第九室の展示に《生きもの K》を出品し初入選、会友に推挙されるとともに池田、河原とも意気投合し、1956 年のうちに四人展を二度開催しています。中井勝郎も第 40 回二科展で再入選を果たした一人で、芥川と同じく特待賞を受賞、翌 1956 年には芥川、吉仲のほか九州派の作家たちと九人展を開催しました。

このほか所蔵作品から、同じくアンフォルメルの流れに乗ることなく具象的、形象的表現を行っていた作家として自由美術家協会に参加していた小山田二郎、ネオ・ダダイズム・オルガナイザーの活動に参加する前の荒川修作による最初期のオブジェを紹介します。

* 作品保護のため、芥川（間所）紗織作品の一部は半期展示とします。

前期（6/29～8/4）：《神話より》、《入水するおとたちばな姫》

後期（8/6～9/8）：《民話（1）》、《女》

郷土の美術

東海の画家と春陽会・独立美術協会

名古屋市美術館では、この地方の作家の作品を積極的に収集し、郷土の美術として、近現代におけるさまざまな美術動向を研究してきました。なかでも戦前期、愛美社*やサンサシオン**を筆頭に、この地方ならではの美術が開花したことは注目に値します。しかしながら、地方独自の運動は短命に終わるものが多く、それぞれの作家のその後の活動について紹介する機会は、多くはありません。また、地方の美術は中央画壇の動向にも大きく影響されるため、中央との関係性にも目を向ける必要があります。ここでは、春陽会と独立美術協会という、現在まで続く二つの美術団体に着目して、東海地方の画家たちが中央画壇とどのような関わりをもっていたのかを探ります。

春陽会は、院展の日本画部と対立した洋画部の画家（小杉放菴、山本鼎、木村莊八、中川一政ら）を中心に 1922 年に創立されました。素朴で穏健な画風を共通の特徴としつつも、明確な主義をもたずそれぞれの個性を尊重したことから、裾野の広い団体へと成長しました。第 4 回展（1926 年）で初入選した水谷清の《セビラの夜祭（カルナバレ）》はフランス留学中（1929～31 年）の作品で、帰国後の第 10 回展（1932 年）に出品したものです。鬼頭鑑二郎はフランス留学中の 1927 年に会員となり、第 12 回展（1934 年）まで、滞欧時代の作を交えながら出品しました。滞欧作である《[風景]》は、地名などの詳細は不明ですが、春陽会展に出品した可能性が考えられます。宮脇晴と山田睦三郎は愛美社の活動で知られますが、春陽会にも長く関わりました。宮脇の日記には、第 11 回展（1933 年）に初入選したときの心情が克明に記録されています。愛美社以後の宮脇は、濃密な細密描写から離れ、おおらかな作風へと変化しています。《橋》は第 16 回展（1938 年）出品作です。山田の《[伊勝の森]》は現・昭和区伊勝町付近の風景を描いたものと思われ、初入選した第 13 回展（1935 年）に「刈入頃の風景」として出品されたことがわかっています。

独立美術協会は、里見勝三らを中心に新時代の美術の確立を目指して 1930 年に結成されました。結成当初からフォーヴィスムとシュルレアリスムという二つの動向が混在し、多彩な表現が生まれています。三岸好太郎と伊藤廉は、いずれも創立会員のひとりです。三岸は春陽会でも活躍しましたが、独立美術協会の立ち上げ以後は独立美術を主たる発表の場としていきます。《花の静物（白百合）》は第 2 回展出品作です。伊藤の《岩山 夏》は、第 3 回展目録に記載のある「岩山」と題した 5 点のうちの 1 点と考えられます。下郷羊雄は、三岸との出会いをきっかけに、第 4 回展（1934 年）に出品しています。同年の三岸の死によって協会との関係性は薄れてしまっていますが、その後は新造型美術協会やナゴヤアバングルドクラブなどを活動の場として名古屋のシュルレアリスムをけん引しました。

*愛美社：岸田劉生らによる草土社の展覧会に刺激を受け、大澤証一郎らが 1917 年に創設した洋画団体。徹底した細密描写による写実を追求した。

**サンサシオン：鬼頭鍋三郎、松下春雄らが 1923 年に創設した洋画団体。印象派のような外光表現、自然主義的な描写を特徴とする。

コレクション解析学 芥川（間所）紗織《古事記より》

芥川（旧姓：山田）紗織は、愛知県渥美郡高師村（現・豊橋市）に生まれました。一家で東京に移り住んだ後、東京府立第二女学校を卒業、東京音楽学校（現・東京藝術大学音楽学部）へ進学し、声楽家を志すものの、のちに作曲家となる芥川也寸志と結婚、出産後の1950年代初めより猪熊弦一郎に油彩を、野口道方に染色を習い始めると声楽をやめてしまいます。1953年頃には高校の同級生であった赤穴桂子の勧めで新制作協会展に油彩を出品、翌1954年にはアンデパンダン展、モダンアート協会展、女流画家協会展などに次々と染色画の作品を発表、その活躍が岡本太郎の目に留まり1955年には第40回二科展の第九室に出品、特待賞を受賞し、同時代の新人作家として注目されました。

初期に「女」を題材にした作品を多く手掛けていた芥川は、この頃から新たに日本の神話や民話をテーマに選び、制作に取り組んでいきます。画題の変化をもたらした影響の一つに、1955年に日本で開催されたメキシコ美術展、特にメキシコ近代美術との出会いがあると考えられています。展覧会を見る少し前からルフィーノ・タマヨ（1899-1991）の絵画に惹かれていた芥川は、その色彩や形態が古代から同時代美術まで、また民芸品や人形にも共通していることを発見し、国と国民の生活と作家が密接につながっている国を素晴らしく思う、と当時の雑誌に語っています。

また、同時期に愛読していた『日本民族伝説全集』（1955-1956年発行）には、日本各地の民話や神話が都道府県別に収録、紹介されています。国生み、神生みなど人の想像力をはるかに上回るスケールの大きな話から、地域は異なっても似通った筋書きの民話まで多岐にわたるおはなしに触れることで、芥川はその普遍性や自国である日本、そして人々の生活との結びつきを見出し、次々と作品に表していきました。

神話を題材にしたシリーズの中でも、その大きさから代表作の一つとされる《古事記より》（1957年）には、アマテラスオオミカミ（女神）とスサノオノミコト（男神）が登場します。天の安の河をあいだに左右に分かれ、どちらも口を大きく開けて歯をあらわにし、体内から何かを吐き出す姿は神というより妖怪やお化けのようです。鮮やかな色やリズムミカルな形が明るく楽しそうな印象を与え、親しみさえ感じさせます。

* コレクション解析学 2024

当館のコレクションから1点を選び、その魅力を学芸員が紹介する美術講座です。

本作品についての講座を以下のとおり予定しております。

日時：2024年8月31日（土）14:00-（約90分）

演題：「生みの苦しみ、怒り、悲しみ」

講師：清家三智（当館学芸員）

会場：当館2階講堂（定員180名、先着順、入場無料）

生誕100年記念 芥川（間所）紗織プロジェクト について

愛知県生まれの画家、芥川（間所）紗織（1924-1966）は、女性が表現者として自立し、活動することが難しかった時代に、前衛美術の分野でそれを成し遂げようとした先駆者の一人として近年再評価が進んでいます。東京国立近代美術館や東京都現代美術館をはじめ、全国美術館が作品を収蔵し、2009年には横須賀美術館、一宮市三岸節子記念美術館を巡回する回顧展も開催されました。

名古屋市美術館では、郷土にゆかりのある作家として、また渡米前の河原温や岡本太郎などとの関わりから戦後美術を語るうえで欠かせない存在として認識し、全長6メートルを超える代表作《古事記より》（1957年）や、晩年の抽象形態による油彩作品《朱とモーヴA》（1963年）などの計6点を収蔵しています。

一昨年、ご遺族の代表者から「2024年に生誕100年を迎えるにあたり、各館が所蔵する芥川（間所）紗織の作品を、多くの方に見ていただければ一年にしたいと考えている。無理のない範囲でご協力いただけないか」との相談を受け、これに賛同することとなりました。県内では他に豊橋市美術館、刈谷市美術館が参加しています。また今回のプロジェクトを機に、カタログレゾネ（作品総目録）作成に向けた調査も関係各所と協力して進められており、その過程で所在不明だった作品の情報なども寄せられています。

当館では、名品コレクション展Ⅱのうち、現代の美術のコーナーで「芥川（間所）紗織と1950年代」と題して特集を組み、所蔵する6点すべてを展示いたします。また夏休み期間中には、芥川（間所）紗織が作品制作にもちいた「ろうけつ染」の仕組みを知る、子ども向けワークショップを開催予定です。

この機会に、当館だけでなく全国の美術館へ足をお運びいただき、芥川（間所）紗織という画家とその作品の魅力を知っていただければ、参加館としても幸いです。くわしくは設置しているチラシおよび同プロジェクトの特設サイトをご覧ください。

名古屋市美術館  Nagoya City Art Museum

名古屋市中区栄二丁目17番25号（芸術と科学の杜 白川公園内）

TEL 052-212-0001 FAX 052-212-0005

<http://art-museum.city.nagoya.jp/>